

申請者: 稲山 健司

論文題目 組織過程としての技術転換
: 長距離高速電車の発展過程

審査員 楠木 建
長岡貞男
山内弘隆

この研究は、日本国有鉄道の長距離旅客列車が「客車列車」から「電車列車」へと根本的な技術体系の変化を伴う大きなイノベーションを起こし、「東海道新幹線」へと結実するプロセスを、経営史的方法で解明したものである。技術体系の転換期には、それまでに蓄積されてきた経営資源の有効性が著しく低下したり、新しい技術体系に対応するために組織を大きく変化させなくてはならない。さらに、新しい技術体系は、その初期の段階ではとくに、既存の技術体系と比べて全面的に優れているというわけではなく、何らかのトレードオフを抱えているのが普通である。このような問題意識をもとに、新技術体系の旧技術体系に対する優越性・正当性がどのような組織過程を通じて構築されるのか、ということに分析の焦点がおかれている。

評価すべき点として、第1に、上で述べた問題意識と歴史的な視点から、時間幅を長く取った、ダイナミックな組織分析を行ったという方法的な意義があげられる。新技術を開発した普及させるために必要な長期的な組織変革の視点でイノベーションを分析することはきわめて可能性に満ちた研究方向である。

第2の評価できる点は、事例の記述の豊かさである。著者は4年間に渡り、27人の人々に42回のインタビューを繰り返している。さらには車両開発に関わる研究会や委員会の議事録など未公開資料が縦横に駆使されている。新幹線にいたる電車列車のイノベーションは、20世紀の日本がリードしたイノベーションとして最も重要なもののひとつであるが、そのマネジメントに注目した事例研究としては、過去に類例がない水準にあるといえる。

第3に、主張の面白さである。著者は、技術体系の転換を伴う非連続的なイノベーションほど、それが正当性を組織的に獲得するには困難がともない、その結果、組織過程に注目すれば、連続的で漸進的なマネジメントを必要とする、と結論づける。このような主張は、歴史的研究の強みを生かしたものであり、イノベーション研究にとって示唆に富むものである。

ただし本研究にはいくつかの不完全な点がある。この研究は官僚制組織の変革や適応力の条件など、今日的な経営学の問題についてさまざま示唆を含んでいる。しかしこの論文では、そのような潜在的なインプリケーションが十分に議論されているとはいえない。この点がいかにももったいなく思える。しかしながら、上述したこの研究の視点の面白さと今後の研究の可能性を考えれば、このような問題点はむしろ挑戦すべき今後の課題として考えるべきである、と審査員は判断した。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の著者が一橋大学学位規則4条第1項の規定に準じた取り扱いにより一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。